

ライフスタイル移民としての日本人女性 ——インドネシア・バリ島の事例から——

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻
ニ・ヌンガー・スアルティニ

本論文は、グローバル化時代における個人のオルタナティブな生き方として、自分に合う暮らし方を海外に求めるライフスタイル移民に注目し、その生活実態を明らかにしたものである。具体的には、インドネシア・バリ島で暮らす日本人女性たちへの聞き取り調査を通して、経済・社会的な上昇や既存の価値観にこだわらず、スローライフを志向する自身の価値観を国際移動の動機とする女性たちを対象に、自立的・主体的な女性移民として記述し、分析することを目的とした。

本論文で用いるデータは、バリ島で暮らす日本人女性を対象に、筆者が2009年8月から2015年8月にわたって実施した聞き取り調査に基づくものである。その聞き取りデータからバリ島に移住する日本人女性のライフスタイル移民のモノグラフを作成し、バリ島に移住した経緯、移住先での暮らしについて分析した。本論文は序章と終章を含めて、全体で8つの章から構成されている。以下では、それぞれの概要を述べる。

序章では、先行研究にとりあげた女性移民の動向、国際移動における新たな移民の形態を概観して、その特徴を把握したうえで、本研究で取り組む課題とその方法を説明した。

第1章では、序章にまとめた新たな移民の動機と女性の国際移動の変化を踏まえ、日本人女性のライフスタイル移民について分析した。まず、日本人の海外渡航の歴史を概観し、1964年の海外渡航の自由化と、その後の日本人の海外旅行の変化について把握した。これらの全体状況を踏まえたうえで、女性に焦点をあてて、日本人女性の海外観光旅行の変遷を検討した。その結果、ライフスタイル移民は観光を通じて移民の動機を獲得したことが明らかになった。

第2章では、バリ島の観光開発を中心になぜ彼女たちはバリ島を目指すのかを明らかにした。まず、オランダ植民地時代に欧米人によって形成されていった「楽園」イメージの過程を確認した。つぎに、1970年代末からの外貨獲得の手段として観光開発が展開されていく状況を把握した。バリ観光にはセルフ・オリエンタリズムが強く反映され、日本人女性はバリ島の魅力に惹かれていく。

第3章は、1970年代から2000年代にバリ島に移住した18人の日本人女性をとりあげ、モノグラフとしてまとめた。バリ島における観光開発の流れに基づき、彼女たちが初めてバリ島を訪れた時期を、1970年代、1980年代から1990年代、2000年代の三つに区分し、それぞれの時代における特徴および共通点を析出した。

第4章では、日本人女性がバリ島に移住するプロセスを明らかにした。まず、彼女たちのインドネシア以外の国への海外渡航経験について、つぎに、バリ島を訪れた経緯について、そして、バリ島に移住したきっかけと彼女たちが憧れたバリ島での暮らしについて、それぞれ検討した。

第5章では、バリ島に移住する日本人女性の国際結婚、国籍と在留資格に関する課題を取りあげた。まず、国際結婚について、バリ島における日本人女性の場合は、従来のハイパガミー志向婚ではなく、脱ハイパガミー志向であることを明らかにした。つぎに、国際結婚にともなう国籍の選択について、国籍選択の基本的な法制度を確認したうえで、結婚にともなう国籍選択、および在留資格、それらと密接にかかわる家族の問題を検討した。さらに、独身である場合の在留資格に関わる問題についても検討した。

第6章では、バリ島に移住する日本人女性の職業生活、理想のライフスタイルとの関係を取りあげた。まず、バリ島での彼女たちの働き方について、日本人オーナーの従業員の場合と、起業家の場合について検討した。つぎに、彼女たちが仕事上、いかなる困難に直面し、それをどう乗り越えてきたのかを明らかにした。さらに、彼女たちが感じている仕事に対するやりがい、現地に与える影響についても考察した。

終章では、本研究の成果とその意義を提示した。まず、第一に、ライフスタイル移民の移住に至るまでの過程を、バリ島在住の日本人女性への聞き取り調査を通して、実証的に明らかにした。日本人女性のライフスタイル移民について、その詳しい実態を捉えた先行研究が存在しない現在、本研究はその先駆的研究として位置づけられる。第二に、ライフスタイル移民の日本人女性の国際結婚が、「脱ハイパガミー志向結婚」であることを明からにした。新しい国際結婚の型を析出し、「脱ハイパガミー志向結婚」として提示したことは、本研究の意義である。第三に、彼女たちは結婚後も国籍の維持を通して、自らが志向するライフスタイルを維持しており、国籍選択がより長期的、戦略的な観点から選択されていることを見出した。志向するライフスタイルの変化に応じて、移住先を主体的に選択し続けるという点は、ライフスタイル移民の先行研究において見落とされていた点であり、本研究が提示した新たな視点である。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	ニ・ヌンガー・スアルティニ
論文審査担当者	(主査) 教授 下夷 美幸 教授 長谷川 公一 教授 永井 彰 教授 木村 敏明 准教授 小松 丈晃
論 文 名	ライフスタイル移民としての日本人女性 ーインドネシア・バリ島の事例からー
<p>本論文は、グローバル時代におけるオルタナティブな生き方として、自分に合う暮らし方を海外に求める「ライフスタイル移民」に注目し、その実態を明らかにしたものである。具体的には、インドネシア・バリ島に暮らす日本人女性への聞き取り調査を通して、バリ島に移住した経緯および移住後の国際結婚と仕事について分析したものである。本論文は序章と終章を含めて、全体で8つの章から構成されている。</p> <p>序章では、ライフスタイル移民に関する内外の先行研究を整理し、本研究で取り組む課題とその方法を明示している。第1章では、日本人の海外渡航の歴史を整理したうえで、日本人女性の海外観光旅行の変遷を把握し、ライフスタイル移民と観光との関連を論じている。第2章では、バリ島の観光開発の歴史をたどり、オランダ植民地時代に欧米人によって形成された「楽園」イメージを出発点に、インドネシア独立後、オリエンタリズムを活用したバリ観光開発とともに、日本人女性がバリ島の魅力に惹かれていったことを明らかにしている。第3章では、筆者の聞き取り調査をもとに、1970年代から2000年代にバリ島に移住した18人の日本人女性をライフスタイル移民ととらえ、第4章から第6章の分析の基礎となる、詳細なモノグラフをまとめている。</p> <p>第4章では、日本人女性がバリ島に移住するプロセスを分析し、パッケージツアーでバリ島を初めて訪れた彼女たちが、その後自由旅行で長期滞在を繰り返し、脱物質主義的な生活を体験していかなかで移住に至るという過程を明らかにしている。第5章では、バリ島移住後の日本人女性の国際結婚について分析し、彼女たちの現地の男性との結婚が、従来の国際結婚にみられる社会経済的地位の上昇を求めるハイパガミー志向結婚ではなく、「脱ハイパガミー志向結婚」であることを明らかにしている。第6章では、バリ島移住後の日本人女性の仕事について、日本人オーナーに雇われているケースと起業家のケースについて分析し、いずれも日本では得られないやりがいを感じていることを明らかにしている。終章では全体を総括し、本研究の意義を示している。</p> <p>本研究は、これまで知られていなかったライフスタイル移民としての日本人女性の実像を詳細に記述し、丹念な質的分析から移住プロセスを解明するとともに、移住後の国際結婚が従来とは異なる「脱ハイパガミー志向結婚」であることを提示したものであり、斯界の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	